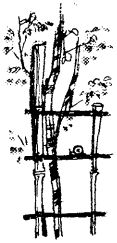
ヨーロッパの旅（三）

平井信義



ストックホルムでの楽しい思い出は、十五年前にさかのぼる。それは、スカンセンという丘での一夕であった。その丘は、一帯に遊園地になっていたが、北欧における古代から近代までの住宅が、丘陵のそこここに建てられており、歴史的な住宅の移り変わりが、視覚を通じて認識されるようになっていた。また、丘の頂上には広場があって、そこには小さな舞台が作られてもいた。

八月の北欧は、まだまだ昼が長い。午後の六時になっても七時になっても、太陽は高く輝いていた。私がスカンセンの坂道を登り始めたのは、夕飯をすませてからであったから、七時過ぎではなかったかと思う。色とりどりの民族衣裳を身につけのぼっていく人々の群をさけて、私は裏手に通ずる道を選んで歩いていった。そこからは、ストックホルムの町並や塔、そして海が、手にとるように見えた。古くはないが、静かな落ちついた都会の趣が屋根から屋根へと伝わって、私の胸に通じてくるように思えた。

ヨーロッパの旅で、このように人々から隔絶されて、一人になってみると、言い知れぬ感情のみがわいてくることがある。そして、いつの間にか眼に涙がたまって、それが頬を伝ったり、或いは頬笑みが浮んでくる。このような感情がなぜわいてくるのであろうか。異郷という言葉が浮んでくる。郷愁という言葉がきこえてくる。それが、何を意味しているのであろうか。私は、近くの木の葉をむしって、口にくわえる。そうしてわいてきた感情をもてあましてしまうのであった。

そろそろと歩みをのばしながら、わずかばかりの林を通り抜けると、丘の斜面がひらけ、そこには、いくつもの小さな掘立て小屋が並んでいた。十平方メートルぐらいの区画が次々と区切られ

ていて、そこに、私の背丈ぐらいの小さな小屋が、それも一つ一つが皆ちがったデザインで建てられていた。何だろう——といぶかしく思いながら近づいてみると、私の足音に気づいたのか、小屋の小さい窓から一人の男の子が顔を出した。十歳前後のあどけない顔に微笑をたたえ、「寄って、お茶をのんでいきませんか？」と、英語で誘った。それは、子どもの住宅だったのである。私も微笑を返しながら、喜んでそれに応じ、ようやく背をかがめて通らなければ入れないような入口から、中に入った。

三畳ほどの部屋であったが、中には棚があって、そこに大工道具などがのせてあった。小さな机の上には、お茶の道具が一式あって、魔法瓶からお湯を注げば、紅茶をいれることができるようになっていた。その子どもは、ちょうど、カーテンを作っているところで、ピンクの布ぎれの端から糸がたれていて、その先に針がついていた。

「この家は……」と、その少年がいった。「私自身で作ったのです。前もって頼んでおくと、家を建てる権利が得られるのです。そして、材木や釘や大工道具など、すべて貸してくれるのです。家をどのように建てるかは、ぼくのプランにまかせられるのです」その少年の青い眼は、輝いていた。

「とても快適ですね。ここへ泊ることもあるのですか？」

「残念ながら、そのスペースはありません。これだけの広さですから……。ただ、このそばを通るお客さんを招待するのが楽しいのです。あなたは、どこの国の人ですか？」

「私は日本人です。一年ほど西ドイツで医学を勉強していたのですが、いま、帰国をする途次に、この美しい国に立ち寄ったところです」

「日本については、富士山の写真をみたことがあります。非常に美しかった。たしか、雑誌だったと思います」

それ以上は、日本についての知識を持っていないようであった。私は、鞄の中から、小さなコケシの人形を取り出した。いつも世話になった人にお礼としてあげることにしている品である。

「これを、今日の招待のお礼にあげましょう。日本独特の人形で、コケシといいます」

「コケシ？　このノートに書いて下さい。日本字でも書いて下さるとありがたいのですが……」

私は「日本」と書いて、日という字が太陽からの象形文字であることを説明した。その少年はコケシを手にした時から、まるい眼をいっそうくりくりさせて、私の顔を見、私の書く文字を見、そしてまた、私の顔を見た。その顔は、今日でもはっきりとよみがえってくる。何年たっても、忘れ得ぬあどけない顔である。

あれから十五年たったから、彼はもう立派な青年になっているはずである。どのような青年になっているであろうか。恐らく

あの頃の童顔は消え、会っても全く判別することはできないであろう。私も、あの頃はふさふさした真黒の髪の毛をしていたが、今はびんが白くなり、頭頂の毛はうすくなっているから、彼と会ったとしても、その時の私であることは気づかないであろう。今回の滞在でも、万々一の奇遇があるかも知れないと、カフェに坐って人通りを眺める時にも、町を歩いている時にも、しばしばその子どもの顔を思い浮べていたが、奇遇は遂に訪れなかった。人生とは、そのようなことが多いものである。

お茶を一杯のんでから、私はその小屋を出た。窓から顔を出したその少年は、右手にしっかりとコケシを握って高くかざしながら、何回となく、「ありがとう」といった。私が再び林の中に影を消すまで、彼は顔を出していた。私も、何回か手を振っては、別れを惜しんだ。

今回の滞在では、最早、シーズンが過ぎていて、小学校も始まっていた。一つだけ子どもの小屋が残っていたが、それも半分は解体されたままになっていた。ひそかに、新しい少年とのめぐりあいを期待していたのであったが、それも果たされなかった。

再び、十五年前の思い出に帰る。林の中の小道を上へ上へと登っていくと、次第に人々の動きが目立ってきた。そして、頂上の広場に出ると、そこには、舞台を中心にして円形に大勢の人々が集まっていた。女の人の衣裳は、胸にふくらみを持ちスカートのひだの多い北欧の晴着であり、その色は年齢にふさわしくはでなものやしぶいものがあった。男の人々は、チロルハットに似た帽子をかぶり、ニッカーズボンをはき、ベルトをしている者が多かった。

拍手に迎えられて、楽隊が来た。そして、舞台の脇にある楽隊用の小さい囲いの中に入った。間もなく、一声高く吹奏が行なわれ、引続いて軽いミュージカルが流れ出すと、待ちかねたように幾組もの男女が腕を組んで舞台にのぼり、くるくると廻るように踊りはじめた。ヨーデルも入る。足ぶみも入る。みなにこにこして、楽しそうであった。一曲終ると拍手が起き、舞台の上の人々はホッとしたようにただずむが、引続いて曲が始まると再び熱狂的に踊った。私自身も、その渦の中に入って、踊り狂ってみたいほどの楽しいふんい気であった。そのようにふんい気にひたりながら、時のたつのも忘れていたが、ようやくあたりがたそがれ始めたので、時計をみると、すでに十一時になっていた。まだまだ続くであろう踊りの渦、あるいは明方まで踊り続けるのかも知れない——そうした人々の群を背にして、私は一人、夕陽の沈む方に向かって坂道をおり、背の高い叢を背にして芝地に腰をおろした。遙かに楽隊の奏でる音楽がきこえてきた。

夕陽は、どんどんと沈んでいく。赤くはあったがあまり大きくならない夕陽であった。時々、風にゆらめくように、最後の陽の

光をかざしながら、西の低い丘に下の部分をかくし始めると、容赦もなくどんどんと姿を消してしまった。あとには、黒みがかった夕焼空が残り、それもやがて消えた。十一時半になっていた。あと二時間もすると、再び日の出である。はかない北欧の夜空を仰ぎ、満天に輝き出した星の群を見ながら、歩いてパンシオンに戻ったのであった。

今回の旅でスカンセンを訪れたのは、日曜の午前であった。広場にはすでに幾組かの子ども連れの家族が来ていて、広場を一周する豆汽車にのりこみ、私の方に手を振りながら団欒を楽しんでいた。また、前の時には見なかった小さな池があり、そこに群がっている水鳥にパン屑をやっている家族連れもあった。私が夕陽をみながら坐った場所ははっきりはしなかったが、そのあたりをあちこちと散策している間に、何匹ものリスが走り寄ってきて私の顔を見上げ、餌を与えるようすがないとわかると、慌てるようにして叢の方へ走っていった。何か餌をもってきていなかったかと、私がポケットを探っているあいだ、私の手もとをみながら鼻をうごかし、手をしごいているリスもいた。しかしポケットから出した手に何もないとわかると、そのリスも走り去っていった。

スカンセンの入口から右手の坂をのぼると、新しく水族館ができていた。その左隣りに、これも前にはなかったと思われるが、子どもの遊び場ができていた。簡単な雨天体操場のような建物があり、その中で十数人の子どもたちがはしゃいでいた。

よくみると、すべてががらくたであった。廃物利用——というわけである。古い自動車が一台おかれているほか、枯れた二本の大木の間に綱が渡してある部分と、大きな網が天井から床に届くばかりにつってあり、その中に合成樹脂のスポンジが大小、それもさまざまな形で投げ込まれてある部分とがあった。子どもたちはその網に集中していた。小学生ぐらいの女の子も男の子もおり、幼児もその中にまざっていた。

網目のところに手をかけ足をかけて、高みまでよじのぼる。高い天井まで手の届く高さにのぼっている子どももあった。子どもたちは、自分の力量に応じて高いところまでよじのぼり、そこからスポンジめがけて飛びおりるのである。スポンジの弾力にはねかえされて、再びいい加減の高さの宙に飛び上る。また落ちる。何回かそれがくり返されていくうちに、遂にはスポンジの間に深く身を埋めることになる。そこから再びはいあがって、網を伝わって、高いところにのぼる。そして、飛びおりるのである。そのようなことを、何回も何回もあきずにやっている。私自身も、思わず、いっしょになってそれをやってみたい衝動にかられたほどである。四〜五歳の男の子は、まだ高いところにのぼる勇気がなく、低いところから飛んでは、スポンジとスポンジの間に深く沈み、そこからきゃっきゃっといいながら出てくるのであった。

太い綱を渡っている子どもがあった。高さ二メートルぐらいのところに斜めに張ってあったが、その下には同じスポンジが敷きつめてあるので、落ちても痛くない。いたずらそうな女の子が、わざとあぶなっかしい身振りをして、下におちてみせた。スポンジの弾力がその子をはね返し、二〜三回飛んでみせてから、床の上におりてきた。

このような子どもの遊びをみていると、際限がない。目を輝かし、からだを張って遊んでいる子どもの姿は、見事である。子どもたちに、このような遊びの機会を与えるにはどうしたらよいであろうか。廃物を利用して、このような遊びが実現される、——その着想に感心した。子どもの心の躍動を知っている者のみが、このような遊び場のくふうをすることができる。わが国の遊園地にくふうされているさまざまな乗物が、この遊び場におかれているものにくらべ、子どもの心の躍動にどれだけ役に立っているであろうか。このスカンセンにも、広場ではモーターで走る豆汽車が家族をのせてぐるぐる回っていたし、子どもたちの笑顔も見られた。しかし、がらくたのある遊び場での遊びの方が、子どもの心にぴったりとしたものではなかろうか。網の中からでてきた女の子は顔は紅潮し、呼吸ははずみ、汗をびっしょりとかいていた。

丘をおりると、一団の小学生の女の子に会った。女の先生に引率されて、博物館からでてきたところであった。にぎやかに話をしながら、私が立っている方へと歩いてくる。とりどりの洋服を着ていた。みると、若い女の先生の服装は全くのミニスカートである。膝上二十センチにも及んでいただろうか。その上、子どもたちの半数がミニスカートなのである。私は、いよいよこのようなスタイルが、すべての年齢層に及ぶことを思った。しかし、ふと思い返してみると、もともと小学校の女の子のスカートは短かったはずである。女の子たちがミニスカートであるのは当り前で、女の先生からの連想が、年齢を超えてしまったことになる。おとなが子どものようになってきたのだ——と思うと、何だかひとりでおかしくなって、くっくっと笑いがこみ上げてきた。子どもがおとなの流行にそまってきたのではなく、おとなが子どものまねをし始めたのだ——それが本当かどうかはわからないけれど、子どもがおとなになり、おとなが子どもになる、おとなが子どもになり、子どもがおとなになる——という言葉が頭の中でぐるぐる回転し始めて、ひとりでおかしくなってしまった。いったい、このような言葉の回転は、何を意味しているのであろうか。

そのような私にはおかまいなしに、一団は私の側をさっさと通りすぎると、別の大きな建物の脇をまがって、姿を消してしまった。私は、大木の茂る林の中の自動車道に沿って走る歩道を歩きながら、人通りもまばらな日曜日の昼近くを、とぼとぼと歩いて町の方に戻っていった。